

聖書：ヤコブ 1：12～18

説教題：試練に耐える人は幸い

日時：2017年7月30日（朝拝）

ヤコブは迫害によって散らされたユダヤ人クリスチャンたちにこの手紙を書いています。彼らが直面していたのは、今日の節でも扱われている「試練」です。彼らは住んでいたエルサレムの地を追われ、行く先々で経済的また社会的圧迫の下にありました。信仰を持ったのに、なぜこんなことが自分の生活にふりかかるのか？とともすると彼らは失望・落胆し、信仰的に危機的な状況にもあったことでしょう。しかしヤコブは手紙の出だしの2節で「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。」と語りました。ビックリするようなメッセージです。実に信仰者は試練をこのように捉えることができるのです。その信仰者が持つべき観点について、今日の箇所からも教えられたいと思います。

ヤコブは12節で「試練に耐える人は幸いです」と語ります。試練そのものは誰にとっても喜ばしいものではないでしょうけれども、ヤコブが言っていることは試練は私たちに有益な働きをするということです。すなわち試練によってこそ私たちの信仰は試される。前にも述べましたように、運動選手も生まれつき良い筋肉を持っていても、それを使わなければ弱くなります。ですから強くなるためには負荷をかけたトレーニングをします。ある意味で抵抗が必要です。それと同じように、私たちも人間の思いとしては試練に会わない方が良いと考えますが、そういう中にばかりいたら信仰はいらなくなります。そして信仰によって生きないことによって私たちの信仰は弱くなります。しかし試練の中に置かれることによって、すなわち信仰によらなければ乗り越えられない課題を与えられることによって、私たちは信仰の力を発揮するように導かれます。そうして言わば信仰の筋肉をつけさせられるのです。信仰による忍耐という特性を培われるのです。こうした神によるトレーニング・訓練を経て、4節で言われていたように私たちはやがて何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者へと導かれるのです。

それと基本的に同じことが12節で言われていますが、ここではその人が「いのちの冠」を受けると言われています。この冠とはマラソン選手が最後に受ける月桂樹の冠のようなものです。ゴールにたどり着いた時に与えられる賞賛、誉れのことです。神が良くやった！と言って授けてくださるものです。マラソン等では優勝した人だけがこの冠

を受けますが、ここで言われている冠はゴールにたどり着いたすべての人に与えられるものです。それは「いのちの冠」と言われています。永遠のいのちという冠です。私たちはイエス・キリストを信じた時点から永遠のいのちに生き始めると聖書で言われていますが、ここで言われているのは信仰のレースを走った最後に与えられる究極的な意味での永遠のいのちのことです。聖化の道のりを走り切って、ゴールに達した時に与えられる神との永遠に途切れることがない交わりのいのちのことです。

このいのちの冠は「神を愛する者に約束された」ものと言われています。信仰の歩みは神を愛する歩みであることが旧約聖書から言われて来ました。申命記 6 章 5 節：「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、あなたの神、主を愛しなさい」これが律法のエッセンスであり、イエス様も第一に大切な戒めと言われました。もちろん私たちの神への愛より先に、神の私たちに対する愛があります。しかしその神を知り、神を愛する応答の歩みに生きることが私たちの信仰生活また敬虔な生活のエッセンスです。その神への愛は、神を信じて試練に耐え抜く歩みに現されなければなりません。愛とは単なる感情や気持ちではなく、実践に示されなければなりません。神は神への愛によって信仰のコースを最後まで走り切った者にいのちの冠を授けることを約束しておられます。

さてこう述べたヤコブは、ここで私たちが陥りやすい一つの問題を取り上げます。それは誘惑に会った時、神によって誘惑されたと言いやすいことについてです。興味深いことは「試練」と訳されている言葉と「誘惑」と訳されている言葉は同じであることです。言い換えれば同じ出来事が、その人の信仰を試し、一層成長させる試練ともなり得るし、また一方ではその人を悪へと導き、罪を犯させる誘惑ともなり得る。文脈により、それはどちらかの意味になります。ここでヤコブが取り上げているのは誘惑された人々のケースです。苦しみの中で誘惑に負けた人が言いやすいのは、神が私をこのようにさせたということです。神が主権者であり、私をこのような場に置いたのは神である。だからこの状況で私が意気消沈し、結果的に罪を犯したとしても、それは神が悪い。神が私をこのように誘惑した。神が私をそそのかした。そのように神のせいにするのです。私たちはこうして都合の悪いことは全部神に責任転嫁し、まるで自分は被害者であるかのような考え方をしやすいものです。エデンの園でアダムが罪を犯した時、神に責任転嫁したことと同じです。しかしこの考えは大きな間違いであることをヤコブはここで述べて行きます。

その理由として彼は二つのことを述べます。一つ目は 13 節の真ん中にあるように「神は悪に誘惑されることのない方であり」ということです。これは神は誘惑されることがあり得ない方だということです。神は全く聖なる方であり、悪が付け入るようなすきは全然ありません。ご自身の内に少しも悪への傾向を持っていないので誰かが悪へ誘惑しようとしても全然誘惑にならない。それほど神は悪とは無関係の方である。そういう方なので、ヤコブは二つ目に 13 節の最後の部分で、神は「ご自分でだれを誘惑なさることもない」と言います。神は誘惑されるような性質を全く持っておられないので、他の誰かを誘惑することも全くあり得ない。そんな心は少しもない。神はただ一つ心で私たちに良いことのみを考え、行動し、また導かれる方です。

では誘惑に負ける時、問題はどこにあるのでしょうか。ヤコブは 14 節でこう言います。「人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。」つまり問題は私たちの欲にあるのです。本来良いものであるはずの試練を誘惑へと変えるのは私たちの欲なのです。欲あるいは欲求はもともとは悪いものではなく、良いものです。食欲、睡眠欲、性欲、どれをとっても、人間を生きて行く上で必要な基本的欲求です。しかし人間の墮落以降、良いものであった欲求も、罪によって色づけられるものとなってしまい、度を超えて自分を主張したり、暴走したりするようになりました。この欲が逆に私たちに支配し、神の御心に反する歩みへと私たちに誘惑するのです。

15 節には面白い言い方があります。「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。」これは子どもを出産する時のイメージです。罪という子どもを産むお母さんは欲です。カギを握っているのは、この欲というお母さんです。ある人は誘惑を感じたことで悩みます。神の御心に反する思いを一瞬持ってしまった。様々な場面で予期できなかった光景を見たり、音を聞いたりして、ある種の誘惑を感じた。それは神とは違い、罪を宿している私たちにとって、また罪が蔓延しているこの世界で生きる私たちにとって、地上にある限り、避けられないことです。しかしここでのヤコブの言葉によれば、そういう場面に遭遇したことそれ自体は問題ではない。問題なのはそこで欲が力を発揮し始めるのを許すことです。正しくない欲をそのままにして放置することです。そうするとどうなるか。するとその欲ははらんで、ついに罪を出産する。つまり欲が問題なのです。これが力を発揮して、いわば妊娠するような状態、あるいは妊娠するようなプロセスを許すことが問題なのです。そうして生み出された罪は熟すると死に至る。生み出された罪をそのままにし、熟するままにしていると、その先に永遠の死がある。神との

交わりから最終的に切り離された霊的暗やみです。ローマ書 6 章 23 節にも「罪から来る報酬は死です」とあります。これは試練をくぐり抜けて完全に達する道とは対照的な、何と恐ろしい道でしょうか！

もちろんこの背後にはさらにサタンという役者も存在します。ヤコブも後にこの手紙でそのことについて触れます。しかしここでは個人的な責任について彼は焦点を当てています。大事なことは、私たちは誘惑に負けることを神のせいにはできないということです。私たち長老派は神の主権という教理を聖書が述べる通り高く掲げますが、それを誤った形で適用してはならない。誘惑に会った時、神のせいだ！と言ってはいけません。問題にすべきは自分の欲です。私たちは「欲がはらむ」というプロセスを踏むことがないように、自分をよくよく点検し、この欲が暴走しないように、その子どもを産むことがないように戦わなくてはなりません。

こうしてヤコブは 16 節で「愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。」と言います。何をだまされないように！ということなのでしょう。それは神についての考え方です。実にヤコブが今日の箇所で大に語っていることは、試練の中で私たちが神をどう考えるかは決定的な違いをもたらすということです。もし試練の中で私たちが神を疑ったら終わりです。神は私を畏にかけようとしているなどと考えると、とても耐え抜くことなどできません。ただでさえ混乱状態にあるのに、神を心から信じることをやめたら、よって立つ岩がなくなります。ですから神について正しい考えを持つべきことを彼は語っているのです。

17 節でヤコブは「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです」と言います。神からは良いものが来る、いや完全なものだけが来る。その良きものの代表として神は光を造られた父と言われています。これは創世記 1 章の、光よ、あれ！と言われて光を創造された神のみわざを思い起こさせます。神はそれを見て、良しとされました。また太陽、月、星などの天体を造られたことも思い起こさせます。この光によって地上のすべての生き物は、その命を支えられています。詩篇 136 篇では、この光を造られた神に対して、また太陽、月、星を造られた神に対して、賛美がささげられています。神は光に代表されるすべての良きものの根源なるお方です。

この父なる神には移り変わりや、移り行く影はないと言われています。この世にあるものはすべて移り変わります。私たち人間もそうです。普段は親切で穏やかな人が、ある日突然怒り、きつい言葉を吐いてビックリさせられることがあります。気前が良く、暖かいと思っていた人が急に冷淡になり、そっぽを向く場合があります。しかし神にはそういうことはありません。昨日までは良いものをくださったが、今日は悪いものをよこすということはありません。神はそういう方であることを試練の中でしっかり確信していることが大事だということなのではないでしょうか。

18節には神の良い贈り物の中でも最高のものの一つが述べられています。それは新しい霊的誕生です。エペソ書2章1節にあるように、私たちはかつては自分の罪の内に霊的に死んでいた者たちでした。しかし神は私たちに新しいいのちを与えてくださり、それによって私たちは神を信じ、神との交わりの中に生きる者とされました。それは「真理のことばをもって」とあるように、「福音のことばをもって」です。神の言葉に触れて私たちは新しく生まれました。それは私たちを「被造物の初穂にするため」とあります。初穂とは後に来る収穫の前触れです。ローマ書8章などから分かりますように、神は全世界に対する救いの計画を持って働いておられます。そしてその先駆けとして私たちをまず救いの恵みに入れてくださいました。神はこのような恵み深い働きをこの世界に対して行なっておられます。その初穂として私たちに救いのみわざを始めてくださいました。とするなら、この方がどうして私たちを誘惑するとか、悪で取り囲んでつまづかせるというようなことをするのでしょうか。それはあり得ないことです！矛盾した話です。支離滅裂なことです。そうではないのです。神は良い目的をもってみわざを進めておられる方です。私たちを初穂として救い、さらに大きなみわざをこの世界に現そうと働いておられるお方です。

私たちは神をどのように考えているでしょう。特に試練の中でどうでしょうか。ヤコブが言っていることは、試練の中で神をいささかでも疑ってはならないということです。神は決してあなたをもてあそんでいるのではない。どうせおまえはこれには耐えられないだろうと言って、ただ上から見物しているのではない。どんな試練に会っても、神は私の益のために良い意図を持ってそれを与えておられます。善であられる神は、それ以外のものは与えないのです。素晴らしい意図をもって今の試練もくださっているのです。そのような目で今、自分が置かれているすべての状況を捉え直すことが必要ではないでしょうか。どんなに厳しく見える試練でも、それは悪いものではないのです。それを悪

いものにするのは私たちの欲です。それに負けないように、私たちは戦わなくてはなりません。そのために必要なのは、神はどのような意図をここに持って導いておられるのかを正しく見上げることでしょう。神は私たちが靈的に成長し、何一つ欠けたところのない、完全な者となるように試練をもくださっています。私たちはその時、それはすべての良き賜物の源なる神からの良きトレーニングの時と覚えたいと思います。私の成長につながるようにと神が導いてくださっている特別の恵みの時であると。そうしてこの神を信じ、神により頼んで、信仰による忍耐の道を進み、いのちの冠を受けることへと至る真の幸いの道、救いの道をこの週も歩ませていただきたいのです。